

宮古・池間島のカツオ産業文化誌 (5) —地域モノグラフの代表的な事例を通じた総括的な検討—

若林良和 (愛媛大学理事・副学長、南予水産研究センター教授)

1. はじめに

筆者は、国内外の地域水産業や漁村地域社会に関する社会科学的な研究の一環として、宮古地域の池間島におけるカツオ産業文化を、歴史学・民俗学・社会学・地理学など学際的な視点から多面的で、かつ、総合的に究明している。具体的には、地域水産誌や地域漁業史の視点から、池間島におけるカツオ産業文化の特性を俯瞰的に把握しようとするのが本稿の意図である。そうした把握には、市町村史や各種の史誌・略史、伝記、それに、記念誌、民俗誌、生活誌など宮古地域に関する史資料が不可欠となる。本稿では、それらの史資料をもとに水産誌や漁業史を再構成することで、池間島にみられるカツオ産業文化の特性を明らかにする。¹⁾

これまでの池間島におけるカツオ産業文化の分析経過を略述すると、次のとおりである。まず、第1報では、池間島のカツオ産業(カツオ漁業と鰹節製造業)を地域の史資料をもとに歴史的な視点から年譜を作成し、近現代産業史にみられる地域カツオ産業の特性を把握した。(若林良和・川上哲也(2019):本紀要第23号所収)次に、第2報において、「ぎょしょく教育」にある7つの「ぎょしょく」のコンセプトのうち、「魚職」の視点から4事例(鮫島幸兵衛、展開過程、漁民信仰、島生活)を取り上げて史的展開を再構成し、池間島のカツオに関わる産業経済と生活文化の特性を明らかにした。(若林良和・川上哲也(2020):本紀要第24号所収)それから、第3報では、「魚飾」の史的展開に着目し、5つの事例(コレラ流行、池前(池間)漁

業組合、愛唱歌、大本丸遭難、雄山丸の中学生救助)をもとに、池間島の村落組織や人間関係など伝統的な側面を検討した。(若林良和・川上哲也(2021):本紀要第25号所収)さらに、第4報において、7つの「ぎょしょく」のコンセプトのうち、「魚職」と「魚飾」の2つの視点から史的展開を試み、7事例(カツオ産業技術と鰹節販路、南方出漁、カツオ一本釣り漁法、ヤビジ(八重干瀬)、鰹節製造方法、信仰儀礼、カンニガイ)を再整理し、カツオに関わる産業経済と生活文化の特性を分析した。(若林良和(2022):本紀要第26号所収)

したがって、本稿の目的は、上述のようなこれまでの分析を踏まえつつ、歴史性と地域性を基本的な視座にして、地域モノグラフの代表的な事例をトピック的に取り上げて、池間島のカツオ産業文化を5つの特性から総括することである。²⁾

2. 池間島におけるカツオ産業文化の特性

(1) 先駆性のある地場産業の形成：池間島カツオ漁業の始祖としての鮫島幸兵衛

池間島では、カツオ漁業の開始以前、カツオは神の使いとして敬われたり崇められたりして、シンカ(カツオ漁船乗組員)はフウンミー(カツオ群)に遭遇すると、恐れて手を合わせていた。また、池間島の人々は捕ることはもちろん、食べることも忌避されたという伝承もあった。

池間島におけるカツオ漁業の創始者は、平良の西里で雑貨店を経営していた、鹿児島県出身



写真1 池間漁港の遠景（筆者撮影、2009年）

の鮫島幸兵衛である。借用したカツオ漁船2隻で1906（明治39）年7月に着業したのが、池間島におけるカツオ漁業の端緒とされる。

それ以来、カツオは、池間島で生を受けた人々に有形無形の恩恵を多かれ少なかれ与えてきた。当時のカツオ漁船は長さ8尋の一本マストの帆をつけ、イケスを備えていなかったことから、シンカ（カツオ漁船乗組員）が桶に活餌を蓄え生かして柄杓で水を汲み替えていた。これは原始的な操業であったが、それ以前のクリ舟に比べると近代的であった。当時の漁場は池間島からイラビジ（伊良干瀬）付近にいたる海域で、池間島からもフゥンミー（カツオ群）を眺めることもあった。当時のカツオ漁船が帆船のため、シンカ（カツオ漁船乗組員）は、無風時には櫓漕ぎで「エッサエッサ」という勇ましい声を掛け合いながら頻りに帰港し、かなりの重労働となった。なお、鮫島は、1909（明治42）年にカツオ漁船を4隻に増強していたが、その経営から撤退した。

なお、オハルズ御嶽の神座には、100合を超える砂香炉が整然と並んでいる。それらのなかにサメシマカオル（鮫島の香炉）があり、不漁になれば、ニガインマ（巫女）は出向いてそれに大漁祈願のための線香を立てたという。



写真2 第4種池間漁港の碑（筆者撮影、2023年）

戦後の最盛期となった1961（昭和36）年のカツオ産業従事者はシンカ（カツオ漁船乗組員）461人、鯉節工場83人に達した。それらの従事者は、池間島内だけでは充足できず、狩俣や大神、西原、佐良浜など近隣からの出稼ぎ者がいた。それらの数はシンカ（カツオ漁船乗組員）120人、鯉節工場42人に及んだ。当時、池間島の人口は2,454人に達し、各戸で電灯がついてラジオも普及していた。そして、池間島には、郵便局や診療所、派出所などの公的な施設が設置された。そのほか、雑貨店や銭湯、理髪店なども多数、営業していた。また、映画館やダンスホールもあり、映画や芝居、歌謡ショー、手品など多様な娯楽が興行された。当時の宮古地域のなかで、池間島は先端的な社会・経済インフラが完備され、生活の質も高まっていた。こうした生活の充実はカツオ産業による恩恵といえ、池間島の発展や繁栄をもたらした基盤がカツオ産業にあったわけである。

以上のとおり、鮫島幸兵衛の着業を契機に発展したカツオ産業は、宮古地域においても地場産業的な先駆性を如実に示すもので、地域経済振興の原動力になるとともに、生活文化にも大きなインパクトを与えた。鮫島は、池間島におけるカツオ産業の発展過程において特筆すべ



写真3 池間島灯台（筆者撮影、2023年）

き人物であり、カツオ漁業の生みの親、さらには、カツオ産業振興の始祖・パイオニア的な存在として位置付けられる。その後、カツオ産業が進展した結果、池間島は「カツオの島 池間島」と称賛されるようになった。カツオ・鰹節は、明治期から昭和期にわたり、黒砂糖や宮古上布と並んで宮古の三大特産品として、地域経済の重要な使命を果たし、地場産業の振興に大きく貢献してきた。そして、現在においても、鮫島の功績を称える取り組みが行われており、これは地場産業としてのカツオ産業のあり方を考える上で極めて示唆的なものになっている。

(2) 経済性に関するデメリットの克服：技術・資本・経営面の特性

1) カツオ漁撈の技術と労働

池間島で明治末期に本格化したカツオ一本釣り漁業の実態を整理しておく。当時のカツオ漁船は、1本の帆と八丁櫓が付き、船長約12～14m、船幅約3mであった。船主から青い唐竹3

本が支給されると、シンカ（カツオ漁船乗組員）は本人がそれを扱いやすいように、釣竿に工夫をして仕上げた。シンカ（カツオ漁船乗組員）は出航までに、カエシのない釣針を付けた釣竿、擬餌針を付けた釣竿、予備用の釣竿の3本を準備したのである。

カツオの活餌となる小魚は池間島の沿岸域に多く生息していた。活餌採捕に絶好の場はヤビジ（八重干瀬：サンゴ礁で何重にも重なるほどの大規模に形成されたリーフ群。大小100以上の所在が確認済み）であった。シンカ（カツオ漁船乗組員）らはヤビジ（八重干瀬）に対する精緻な知識や知恵、卓越した技能を駆使して活餌を捕獲してきた。具体的には、活餌として、バカジャグ（ミナミキビナゴ）、ムギヤ（スカシテンジクダイ）などが利用された。活餌採捕の漁法は敷網に追い込んで捕獲するものである。活餌採捕はカツオ漁業の作業工程のなかで辛い作業であり、潮流が激しくなる台風前後や大潮の時では困難が伴った。ジャグガニダキ（餌採取竹：直径2cm・長さ2mの竹）を手にしたシンカ（カツオ漁船乗組員）は、20m間隔で海へ飛び込み、バカジャグ（ミナミキビナゴ）を追い込んでウーキ（桶）で運び込んだ。当時のカツオ漁船にはイキマ（活間：活魚槽）がなく、シンカ（カツオ漁船乗組員）らは活餌を大桶や大樽に蓄えて活かしながら出漁した。活餌の酸欠防止のために、その海水を汲み替えるシンカ（カツオ漁船乗組員）2名が配置された。航海中、



写真4 最盛期のカツオ船団<池間漁港内>（筆者撮影、2023年）

柄杓で水の汲み替えを断続的に行う必要があり、それはシンカ（カツオ漁船乗組員）にとって、非効率的で重労働であった。その後、カツオ漁船にイキマ（活間）が設置されたことから、シンカ（カツオ漁船乗組員）は活餌換水の労働から解放されたわけである。

シンカ（カツオ漁船乗組員）はトリヤマ（鳥山：海鳥の群れ）の発見に注視した。乱舞している海鳥がいる海面下には、フンミー（カツオ群）がいることが多く、それを発見すると、カツオ漁船は急行したのである。

漁場に到着すると、シンカ（カツオ漁船乗組員）は、カイビラ（しゃもじ状の櫂）で海面を攪乱して小魚が狂乱しているように見せかけ、フンミー（カツオ群）を漁船に引き寄せた。その一方、シンカ（カツオ漁船乗組員）はカエシのない釣針に活餌を掛け、釣獲を進めた。カイビラに替わって散水器が導入されたのは1924(大正13)年であり、漁撈時の労働負担が大きく軽減されることになった。フンミー（カツオ群）がカツオ漁船に来遊すると、餌投げのシンカ（カツオ漁船乗組員）はタイミング良く活餌を投げ入れて漁船に誘引した。これには熟練の技が求められた。シンカ（カツオ漁船乗組員）は、釣り上げられたカツオを脇に抱えて釣針をはずすが、その後カツオの食い付きが良くなると擬餌針の付いた釣針に切り替えたのである。

2) カツオ加工の技術と労働

鯉節製造技術が池間島へ伝えられたのは1912(大正元)年であった。製造工程はミオロシ、ヨツワリ、シルク、バイカンなど14の手作業に及んだ。カツオの大きさによって鯉節の形態と名称が異なったのである。3kg未満のクバン（小判）が半身サイズでカミブシ（亀節）となり、3kg以上7kg未満のチュウバン（中判）、9kg以上のトビダイ（飛び大）は3枚下ろしの



写真5 往時の鯉節工場群<池間漁港内>（筆者撮影、2023年）



写真6 近年の鯉節工場跡（筆者撮影、2009年）

後、背側をオンブシ（雄節）、腹側をメンブシ（雌節）となった。

ケズリの道具にはフダ、キズイ、ガタナカマ、ツキボウ、ハラクリ、ヒキ、マガリの7種類があり、これらはカツオ漁家の婦女子にとって池間島での生活の糧、あるいは、生涯の宝物とされた。戦前、その婦女子は鯉節工場から50本余りの鯉節を頭上運搬で自宅まで持ち帰り、自宅での作業となることも多かった。当時の日当は50銭で1か月15円程度、年収（実働7か月）で100円に及んだ。この収入は当時の米（蓬莱米）4斗俵が3.80円であったことから、漁家の婦女子にとっては良い稼ぎであったという。

こうして製造された鯉節は品質が良く、週1

回程度、沖縄本島へ出荷された。当時、鰹節の価格は変動幅が大きく、不安定な漁家経営に陥った。1910 年代以降、第 1 次世界大戦後の好景気で鰹節の価格も高騰したことから、池間島の経済は活況を呈した。その結果、家屋は次々と新築されて茅葺きから瓦葺きとなった。当時、瓦葺き家屋は、隣村の狩俣に 4 戸しなかったが、池間島では 190 戸に達した。また、生活水準が向上するとともに、消費面での浪費も続いて、池間島のシンカ（カツオ漁船乗組員）は平良の料亭でビールを使って足を洗ったさえと言われている。

3) 技術・資本・経営の特性

カツオの漁撈と加工に関わる特性を 3 つの点に整理し、それらのデメリットを克服した経緯をまとめ、地域水産的な意義について検討しておきたい。

第 1 に、技術の後進性である。池間島のカツオ漁撈技術の後進性を克服するために、カツオの習性をもとにした様々な創意工夫が行われ、生産技術の集積性を高めた。たとえば、池間島のシンカ（カツオ漁船乗組員）は、活餌の宝庫とされたヤビジ（八重干瀬）の実情を的確に観察し、得られた精緻な知識を駆使して活餌を採捕した。したがって、彼らは、卓越性のある知見、豊富な経験をもとに漁撈技術を的確に体得し、自給的な生業から産業的な漁業へと展開した。また、池間島の鰹節製造は当初、製造技術を熟知する者が限られていた。それで、池間島の婦女子が集められ、製造法の詳細は県外の指導員によって伝授された。

第 2 に、資本の脆弱性である。カツオ産業の着業当初である明治後期、池間島での漁業資本が脆弱であったために、カツオ産業の経営体制は、有志による共同出資で設立するクミアイ（組合）方式であった。そして、漁製一体、つまり、カツオ漁獲と鰹節製造を一体化した経営

が行われ、一船一工場の小規模な単位で営まれたことが特徴的である。

第 3 に、経営の不安定性である。カツオ漁獲も、鰹節製造も、国内外のカツオ漁獲や世界経済の動向に直接的な影響を受けて、カツオ漁獲の豊漁不漁、鰹節価格の乱高下など不安定的な状況下にあった。池間島のシンカ（カツオ漁船乗組員）らは経営的に打撃を受けて翻弄されてきた。そうしたなかで、様々な経営努力がなされたのである。

このように、池間島のカツオ産業は上述の技術・資本・経営のデメリットを克服した。池間島では、カツオ産業の技術的な後進性も色濃く、先進地域である日本本土の技術習得を積極的に推進し、その技術の向上は図られてきた。地域間の産業交流をもとに、カツオ一本釣り漁法については鹿児島県や宮崎県から、そして、鰹節製造では愛媛県に、それぞれ技術的な支援を積極的に受け入れた。カツオ産業の将来的な有望性を信じた池間島のシンカ（カツオ漁船乗組員）らは不断の精励によりカツオの漁法と鰹節製造法を習得したわけである。

以上のことから、カツオに関わる産業技術の習得と鰹節販路の拡大で、池間島のカツオ産業が短期間で成長し、資本的な脆弱性、技術的な後進性、経営の不安定性は、たゆまぬ努力で克服された。その結果、カツオ漁獲や鰹節製造が飛躍的に伸張し、徐々に資本力と技術力を高めていき、他の島々に追従を許さない優位性を確保し、経済力の蓄積と地域力の涵養が明白なものとなった。池間島のシンカは、通史的にも、伊良部島（佐良浜）のシンカとともに、宮古地域のカツオ産業の担い手として双核を形成してきた。その結果、カツオ・鰹節は、黒砂糖や宮古上布と並んで宮古地域の三大特産品として成長し、地場産業の基盤を形成し地域経済を大きく寄与したのである。



写真7 池間公民館(筆者撮影、2023年)

(3) 共同性：遭難救助にみられる刹那性と団結性

戦後の池間島におけるカツオ漁船の大きな遭難事故としては、1950(昭和25)年の大本丸(18トンの木造船)の沈没があげられる。カツオ盛漁時の6月に、猛烈な風、山のようなうねりを受けて、大本丸は、船体が2つに折れてトモ(船尾)から、あっという間に沈んだ。現場近くを通りかかった、同僚の漁船である瑞光丸は、ブリッジ(操舵室)やマストにすがりついていた遭難者を次々と助け上げ、大本丸のシンカ(カツオ漁船乗組員)全員を救助した。さらに、遭難者の体温維持のために着替えさせるなど救護も行われた。奇跡的に生還した大本丸のシンカ(カツオ漁船乗組員)の生々しい体験談が残っている。それによれば、覚悟を決めて遺体だけで発見されることを祈って、1枚のタオルを引き裂いて伯父の手首と自分の手首をマストにくくりつけたシンカ(カツオ漁船乗組員)、海に放り出されてドラム缶にすがりついて漂流したシンカ(カツオ漁船乗組員)、いずれも、瑞光丸に救助にされて九死に一生を得たという。

それから、奇跡の生還とされた池間島のカツ

オ漁船である雄山丸(27人乗船)による中学生の救助がある。1967(昭和42)年8月、那覇から石垣行の貨客船である那覇丸の甲板から、中学3年生の当山少年が海中転落した。彼は、真夜中の海をかすかな灯台の光を目指したが、日の出後に目標を失うも助けてもらえるという強い信念で立ち泳ぎを続けたのである。そして、漂流から8時間後、彼は雄山丸に救助された。彼は黒砂糖を溶かした湯を飲んだり、両足をぬるま湯につけたりして手厚い救護を受けた。生還後も、彼と雄山丸のシンカ(カツオ漁船乗組員)、さらには、池間島の人々と交流が続いている。

以上のとおり、カツオ漁船に関わる海難事故を紹介したが、他にも惨事は多くあり、「板子一枚下は地獄」と称される環境下での漁業労働の特殊性から危険労働と位置付けられる。そこで惹起されるシンカ(カツオ漁船乗組員)の心性は刹那性と団結性といえる。海洋環境に大きな影響を受けるシンカ(カツオ漁船乗組員)の生活で育まれる精神性として、海難救助の歴史から、刹那性が明らかである。他方、生命に対する尊厳や執心、池間島に対する思慕の念から



写真8 カツオモニュメント<池間カツオ公園内>(筆者撮影、2023年)

相互扶助的な団結性も強く構築された。そうして、池間島のシンカ（カツオ漁船乗組員）らは度重なる海難事故などを克服するなかで、一体的な共同性を醸成してきたわけである。

(4) 国際性：南方出漁を通じた国際的な交流と協力

池間島のシンカ（カツオ漁船乗組員）による南方出漁は、第 2 次世界大戦前後の 2 度にわたり積極的に展開された。

戦前の第 1 次南方カツオ出漁の端緒は 1929(昭和 4)年である。勝連敏夫ら 7 人の青年が活餌採捕の技術者として神戸経由でインドネシアのボルネオに派遣された。というのも、鰹節の価格下落により、これが格好の出稼ぎ手段となったからである。続いて、ボルネオへ宝泉丸と久松丸が出漁し、カツオの漁獲を行った上で、一緒に渡航していた女工により現地で鰹節製造が行われた。そして、1931(昭和 6)年に、根剛丸(37 人乗船)がトラックへ、宝泉丸(46 人乗船)がパラオへ、それぞれ出漁した。翌年 1932(昭和 7)年の出漁は幸安丸(36 人乗船)と弥栄丸(36 人乗船)のポナペであった。その後も、池間丸や宝泉丸、瑞光丸などがボルネオへ継続的に出漁した。1933(昭和 8)年ごろには、これらの島々へは家族単位での移住も多くみられ、南方カツオ出漁が終戦時まで推進されたのである。

戦後の第 2 次南方カツオ出漁は、沖縄本土復帰以前の 1970 年代より行われた。1970(昭和 45)年に、池間島のカツオ漁船 3 隻が、伊良部島佐良浜のカツオ漁船 2 隻とともに、パラオとパプアニューギニアのラバウルへ出漁した。そして、1974(昭和 49)年のソロモン諸島やパプアニューギニアのキャビアンへの出漁では船団が編成された。1976(昭和 51)年の一隻当たりの漁獲量が 20 トン以上の大漁となり、



写真 9 池間行進曲<池間カツオ公園内>の歌碑 (筆者撮影、2023 年)

1978(昭和 53)年のシンカ（カツオ漁船乗組員）は宮古地域全体で 700 人を超えた。カツオ漁獲の増大に伴い、現地での更なる鰹節増産のために、鰹節製造の指導者が送られた。こうして、1970 年代に、南方でのカツオ出漁が最盛期を迎えた一方で、池間島周辺など沖縄近海域でのカツオ漁業は衰退していったのである。

1981(昭和 56)年以降の世界的な経済不況で大幅に魚価が下落した結果、池間島のカツオ漁船経営は厳しくなった。そして、1982(昭和 57)年にパプアニューギニアの漁業基地閉鎖によって、池間島など宮古地域の南方カツオ出漁者の多くが失職した。その後、1993(平成 5)年には、南方カツオ漁業は完全な撤退となったのである。

以上のことから、池間島のシンカ（カツオ漁船乗組員）は、戦前から戦後にかけて、ボルネオやパラオ、トラック、ポナペ、パプアニューギニア（ラバウル、キャビアン）、ソロモン諸島など南方海域への出漁を果たし、その中心的な役割を果たした。戦前は、経済情勢の変動に伴う鰹節などの価格低下の影響を受けて、海外出漁を余儀なくされるなか、家族ぐるみで南方へ渡航した例も多くあった。そして、卓越した

カツオ漁撈技術と鰹節製造技術をもとに、日本本土へ南洋節が出荷されるほどの隆盛を極めた。戦後は、戦前に匹敵するほどにカツオ産業が進展するなかで、世界的な経済不況という国際情勢のなかで、撤退を余儀なくされ、再び、大量の失業が発生するなど危機的な状況に陥った。池間島のシンカ（カツオ漁船乗組員）は、2 度にわたって、国際的な地域間交流や技術協力のパイオニア的な存在として、また、果敢に南方海域へ出漁するほどの国際性を具有した存在として南方出漁に貢献したわけであった。

(5) 宗教性：漁業信仰にみられる根源的な多様性と共同性

池間島のシンカ（カツオ漁船乗組員）は縁起をかつぐことが多い。以前には、女性のカツオ漁船への乗船が忌避された。たとえば、母や妻に出産があると、そのシンカ（カツオ漁船乗組員）は3日程度、休漁した。また、包丁などの金物を落とすとカツオ漁船を浄め、漁船に訃報がもたらされて不漁が続くと、カンニガイ（神願い：神事・祈祷）を行なった。カンニガイには、そのほかに、ハズミ（操業開始）、マビトゥ（健康）、シンドウ（船長）、ウヤカタ（船主）、ウフユダミ（豊漁）、カリユシ（海上安全）、ボースン（甲板長）、キカンシャ（機関長）、カイケイ（会計）、ミガニミービヤ（メガネ：フウンミー（カツオ群）の探索者）、キカイダミ（機械安全）、リュウグウ（竜宮）、オワリニガイ（漁期終了）、ヒダガン（大漁と航海安全）などがあった。たとえば、南方カツオ漁業が盛んであった1970年代には、平良港からパプアニューギニアなどの南方海域の港に到着までの間、ニガインマ（巫女）は船長宅で毎夕、タビハイヌアグ（航海安全の歌）を唄いながら祈願した。これには言霊のような神秘性があり、船主宅では安堵感が生まれたとい

う。

また、船霊に対する信仰も強い。シンカ（カツオ漁船乗組員）は、その航海で最初に釣獲したカツオの部位、具体的には、ウドゥルツガマ（心臓）、背びれの両端を5cmほど切ったもの2枚、三枚おろして背側の中央の身2切れ、腹側の両端の身2切れの合計7点を椀に盛って、ブリッジ（操舵室）に祀っている船霊に供えた。また、帰港時に、シンカ（カツオ漁船乗組員）は大漁旗を掲げて、腹合わせした2匹のカツオを船霊に供えることもあった。

以上のとおり、沖縄県を代表する海洋民族であり漁撈民族でもある池間島のシンカ（カツオ漁船乗組員）には、漁業信仰が残存し、池間島の精神世界における共同的な宗教性は明白である。カツオに関わる宗教儀礼においても、自然、とりわけ、海に対する感謝や敬意に根ざした共存共栄を前提にして、大漁満足と海上安全に関わる願いのあることが裏付けられた。池間島の経済的な成長や生活水準の向上が進行するなか、カツオをめぐる様々なカンニガイは池間島の生活のなかに色濃く投影され、そうした祭祀が生活の軸、さらには、生産活動の原動力にもなった。それに加えて、池間島の人々の生活文化のなかで、カツオ産業に関連する宗教儀礼や年中行事を通して、相互扶助などの共同性は醸成され、また、共同性に基づく生活の知恵も随所に活かされてきた。池間～宮古～琉球の海は、かりゆしの海として、カツオという恩恵を与えてくれる一方で、牙をむいて海難事故に及ぶことさえある。海の利用に関わる池間島の生活には、特有の規範や独自の心性があり、先人の築いた伝統や歴史が綿々と息づき、池間島の豊かな叙情性もみられるのである。

3. おわりに

池間島におけるカツオ産業文化の俯瞰的な再

検討を目的とした本稿では、先行研究である既存文献の記述、インタビューによる口述記録をもとに、いくつかのトピック的な事例を点描しながら、カツオ産業文化の特性として、①先駆性、②経済性、③共同性、④国際性、⑤宗教性の5点を指摘した。それらを踏まえて、地域カツオ産業の全体的な総括は、以下の3点が提示できるだろう。

第1に、明治末期の池間漁業組合設立を端緒に、カツオ産業は池間島の基幹産業へと成長したのである。これは、単にカツオ漁業の生産組織を超えて、地域の経済や社会、文化など地域全般に大きな影響を与え、池間島全体の方向性を主導する重要な基盤組織として機能し多様な形で地域社会に貢献した。飛躍的な成長を遂げたカツオ産業は、サトウキビ産業、宮古上布製紡業とともに、宮古の三大産業として地域経済を担った。そして、宮古地域において、池間島は、伊良部島（佐良浜）とともに、カツオ産業（カツオ一本釣り漁業と鰹節製造業）の隆盛を誇った島として位置付けられる。

第2に、池間島のカツオ・鰹節は、精神的・社会的・経済的にも、そして、地域的にも極めて重要な価値を持っている。明治後期以降のカツオに関わる産業化が進められるなかで、池間島、そして、宮古地域全域で、カツオ・鰹節の産業的な価値と地域的な意義は大きく伸張してきた。豊穡な海の恵みとしてのカツオは、池間島のシンカ（カツオ漁船乗組員）の誇りの原点となったのである。

第3に、池間島のカツオ産業が完全な廃業に陥るなかで、往時の隆盛ぶりをもとに、カツオ産業をもとに宮古島市としての総合的な水産振興と漁村活性化が図られている。それで、カツオ・鰹節は、地域の価値ある歴史的・文化的な資源、すなわち、プラス志向で地域資源として位置付け直されつつある。つまり、かつての

地場産業であったカツオ産業に、地域ぐるみで新たな価値創造や意義付与につなげていけるような萌芽的な取組が随所に見られるようになった。

なお、筆者は、今後も、カツオ産業の展開過程に注目して、周到な既存文献の渉猟とその整理、フィールドワークの成果をもとに、カツオ産業文化に関する学際的なアプローチを試みていくつもりである。また、池間島にとどまらず、伊良部島をはじめ宮古地域のカツオに関わる産業経済と生活文化を究明していきたい。今後、フィールドワークによる学際的な検討にもとづく研究成果は本紀要などでさらに公表していく予定である。

注

- 1) 本稿の作成にあたっては、文末に示した参考文献のほか、川上哲也氏から提供を受けた各種の史資料、さらに、川上氏の執筆・投稿による新聞記事も参考した。なお、新聞記事については、次のとおりである。

①沖縄タイムス「唐獅子」

(2019年1月23日、2月6・20日、3月6・20日、4月3・17日、5月1・15・29日、6月12・26日)

②琉球新報「東風」

(2022年8月7日)

③宮古毎日新聞「投稿」・「追悼」

(2020年1月25日、2月24日、3月18日、7月29日、10月7日、2022年5月28日、7月1日、10月1日、11月22日、2023年1月25日、3月18日、5月12日、7月28日)

- 2) 本稿は、筆者らがこれまでに公表してきた4報（若林良和・川上哲也（2019）、若林良和・川上哲也（2020）、若林良和・川上哲也（2021）、若林良和（2022））をもとにして

総合的な整理、俯瞰的な再検討を行ったものである。

参考文献

- 池間小学校 (1963) 『池間小学校 60 周年記念誌』
私家 (ガリ) 版
- 伊良波盛男 (2011) 『わが池間島』池間郷土学研
究所
- 伊良波彌 (2013) 『池間島からの視点～ミヤーク
ヅツ・カツオ漁業を中心に～』だしきや企画
- 上里武・本村満 (2005) 『島に生きて ～奇跡を
みた男たち～』私家版
- 大井浩太郎 (1984) 『池間嶋史誌』南西印刷
- 加藤久子 (1987) 「池間島の漁業と離島苦の女性
労働」『地域と文化』第 45 号
- 笠原政治 (2008) 『池間民族考』風響社
- 川上哲也 (2003) 『たまうつ先生』文芸社
- 川上哲也 (2007) 『カツオ万歳』沖縄自分史セン
ター
- 川島秀一 (2005) 『カツオ漁』法政大学出版局
- 久貝克博 (1998) 『宮古回帰』印刷センターよな
みね
- 砂川玄德 (1999) 『宮古島人間風土記～終戦から
復帰まで～』サン印刷
- 平良新弘 (2002) 『海人の島』印刷センターよな
みね
- 仲間明典 (2012) 『佐良浜漁師達の南方鰹漁の軌
跡』地域おこし研究社
- 日本カツオ学会 2012 カツオフォーラム in 宮古島
実行委員会 (2013) 『2012 カツオフォーラム in
宮古島 報告書』2012 カツオフォーラム in 宮
古島実行委員会
- 森田真弘 (1961) 『仲間屋真小伝～池間漁業略史
～』内外水産研究所
- 野口武徳 (1972) 『沖縄池間島民俗誌』未来社
- 前泊徳正 (1975) 『前泊徳正ノート』私家版
- 若林良和 (1991) 『カツオ一本釣り』中央公論社

(中公新書 1021)

- 若林良和 (2004) 『カツオの産業と文化』成山堂
書店 (ベルソープックス 018)
- 若林良和・川上哲也 (2019) 「宮古・池間島のカツ
オ産業文化誌 (1) - 近現代における池間島カツ
オ産業史の整理と検討 -」『宮古島市総合博物
館紀要 23』
- 若林良和・川上哲也 (2020) 「宮古・池間島のカツ
オ産業文化誌 (2) - ぎょしょく「魚職」からみ
た生活世界 -」『宮古島市総合博物館紀要 24』
- 若林良和・川上哲也 (2021) 「宮古・池間島のカツ
オ産業文化誌 (3) - ぎょしょく「魚飾」からみ
た島の村落組織と人間関係 -」『宮古島市総合
博物館紀要 25』
- 若林良和 (2022) 「宮古・池間島のカツオ産業文
化誌 (4) - 2 つのぎょしょく「魚職」・「魚飾」
による検討 -」『宮古島市総合博物館紀要 26』

付記

本稿は、2018～2022 (平成 30～令和 4) 年度科
学研究費補助金「カツオを題材とした水産版食
育の実践的研究 - 「ぎょしょく」の体系化とツ
ール開発 -」(基盤研究(C) 課題番号: 18K01996
研究代表者: 若林良和 <ただし、コロナ禍の
ために 2023 (令和 5) 年度まで期間延長>) を
活用した成果である。